

宮城県日中友好協会

TEL・FAX 022-274-3811

E-メール jcfa-miyagi@rose.plala.or.jp

ホームページ http://www16.plala.or.jp/miyagikenn/



4月、(卯月 うづき)、いよいよ花見の季節となりましたが、今年はコロナ感染症予防のため、行事が相次いで中止に追い込まれ、留学生との花見や、楽しみにしていた花見酒・花より団子も夢のまた夢になりました。

1. 4月の行事

日 時	行 事 名	場 所
4月24日(土)	宮城県日中友好協会理事会 13:30～ コロナ感染症の影響を考慮し、中止とさせていただきます。	宮城県民会館 401会議室

※ 各地区協会・委員会の行事報告等あれば掲載いたしますので、ぜひFax, メール等でお知らせください

2. 中国の洒落言葉を楽しもう！(青年委員会 吉澤千明)



青年委員会では2月28日国際センター多文化共生センターにおいて「中国の洒落言葉を楽しもう」という講義を開催しました。講師は青年委員会メンバーでもある東北大学工学部助教の羅漢氏。参加者は13名でした。中国の洒落言葉(歇后语)とは、二つの部分からなる成句で、前のたとえの部分だけを言って後の部分を自然と推察させるしゃれ言葉。たとえば(麵棒で火を吹く)とだけ言って(全然通じない)を暗に理解させる類のものです。内容については日本語で解説され、解説を聞いた後原文を講師に続き中国語で発音しました。洒落言葉の解説の中で、贈り物をする時日本人は「つまらないものですが。」と言って贈ることが多いが中国人は言わないなど、感覚の違いなども学ぶことができ面白い

と思えました。中国語学習者でなくても楽しめる内容です。青年委員会では今後も今の環境で安全にできる活動を企画していきたいと思えます。人数制限がある中での開催になりますが、会員の皆様が顔を合わせて交流する場になればと考えております。

今後の予定

1) 4月25日(日) 10時～

「中国の洒落言葉を楽しもう！」国際センター多文化共生センター 研修室B 先着15名
参加費1000円

2) 6月6日(日) 10時～

「漢方講座 梅雨時の過ごし方」国際センター多文化共生センター 研修室B 先着15名
参加費500円

3. これからの県日中の予定

- 1) 宮城県日中友好協会理事会 4月末 書類配布で行います。
- 2) 宮城県日中友好協会理事会 7月 3日(土) 13:30～ 宮城県民会館 401会議室
- 3) 会計監査 7月 3日(土) 10:30～ 宮城県日中友好協会事務所
- 4) 宮城県日中友好協会定期総会 9月4日(土) 13:30～ 宮城県民会館 601会議室

考える

きょう

時評

あした

中日の相互扶助 共同発展に期待

駐新潟中国総領事

孫 大剛

自然災害が多い国だが、重大な災害を前に互に見守り合い、助け合っ、いわゆる「相互扶助」の伝統を持っている。

2011年3月11日、観測史上まれに見るマグニチュード(M)9.0の巨大地震とそれに伴う大津波が、東北地方を中心として広範囲にわたり甚大な被害をもたらした。

あれから10年。宮城県などで第一期「復興・創生期間」が間もなく終わり、復興が防波堤や住宅の再建などのハード面から、まちのにぎわいや人々の心の癒やしなどのソフト面へと転換する第二期「復興・創生期間」に移行しようとしている。

大震災から10年

この転換期のさなかである2月13日の深夜、東北地方太平洋沖で再びM7.3の地震が発生した。自然災害はいつ、どこでも起こり得るものであり、持続的な警戒態勢が必要だと警鐘を鳴らした。

中日両国はともに地震などの

自然災害が多い国だが、重大な危機に対しても發揮される災害を前に互に見守り合い、助け合っ、いわゆる「相互扶助」の伝統を持っている。

中国で08年に四川大地震が発生した際、日本政府はすぐさま国際救援隊を派遣してくれた。これは中華人民共和国成立後、中国が受け入れた初めての海外からの救援隊である。

それから3年がたち、東日本大震災が発生した後、中国政府は直ちに15人から成る国際救援隊を日本に派遣した。このチームは最も早く日本に赴き、最も遅く帰国した国際救援隊となった。

11年5月、当時の中国国務院の温家宝総理(首相)が訪日した際、北京市から仙台市に直航し、名取市、福島市などの被災地をお見舞いした。その時、温総理はインタビューに対し「大きな自然災害を前に人類は一つの共同体であり、互いに助け合いに対応していかなければならない」と表した。

中日両国の国際協力は重大な自然災害以外に、公衆衛生上の

自然災害以外に、公衆衛生上の

重大な危機に対しても發揮される災害を前に互に見守り合い、助け合っ、いわゆる「相互扶助」の伝統を持っている。

中国で08年に四川大地震が発生した際、日本政府はすぐさま国際救援隊を派遣してくれた。これは中華人民共和国成立後、中国が受け入れた初めての海外からの救援隊である。

それから3年がたち、東日本大震災が発生した後、中国政府は直ちに15人から成る国際救援隊を日本に派遣した。このチームは最も早く日本に赴き、最も遅く帰国した国際救援隊となった。

深い仙台との縁

コロナ禍において宮城県を含む日本各地と中国関連地域との友情がさらに深まり、「相互扶助」の意味合いがより内容豊富となり、その理念が日ごとに広まりつつある。

中日両国の「相互扶助」は地縁が近い隣国同士との付き合い方に基づいているだけでなく、共通点が多い中日文化による伝統的友好に由来しているものでもある。

例えば、仙台市と中国とのゆかりはとても深く、中国の著名な文学者である魯迅(1881~1936年)はここ2年近く暮らした。東北大は彼と数学者蘇步青(1902~2003年)の母校であり、現在当総領事館業務エリア(宮城、山形、

宮城、山形、



孫大剛氏 1962年、中国遼寧省生まれ。大連外国語大卒。95年から1年間、秋田県内で国際交流員を務めた。遼寧省外事弁公室副主任、副主任を経て、2017年2月から駐新潟中国総領事。

福島、新潟4県)内に中国人留学生が最も多い大学でもある。仙台市はこれにより中国と比較的高い知名度を誇っていて、訪日中国人観光客にとって人気のある観光地となっている。民間友好交流においては、宮城県日中友好協会は71年の歴史があり、地方都市で最も早く設立された日中友好協会の一つである。

近年、当総領事館は宮城県の青少年を同じく被災地である四川省汶川県などに招待し、同世代の中国の青少年たちと交流してもらい、中日友好事業が次の世代へと受け継がれていくよう努力してきた。

二つの五輪契機

東日本大震災が発生して10年がたった今日、宮城県、福島県および岩手県などの被災地は次

第にポスト復興期へ歩んできている。今年と来年、東京と北京はそれぞれ夏季と冬季のオリンピックを開催し、中日両国はこれを機に新たな発展を迎える。

中日両国民は互いに助け合い、共にさまざまな困難やリスクに立ち向かうことができるだけでなく、互恵(ウィンウィン)の理念を基に、互いの発展から新たなチャンスを共有することもできると確信している。

今後、当総領事館は業務エリア各県の有識者の皆さまと共に中日の伝統的友好を輝かしいものにし、ポスト復興期とポストコロナ時代の中日地方間の友好交流と実務協力をより一層深めたい。人類運命共同体と新時代にふさわしい中日関係を築くために新たな原動力を注いでいく。